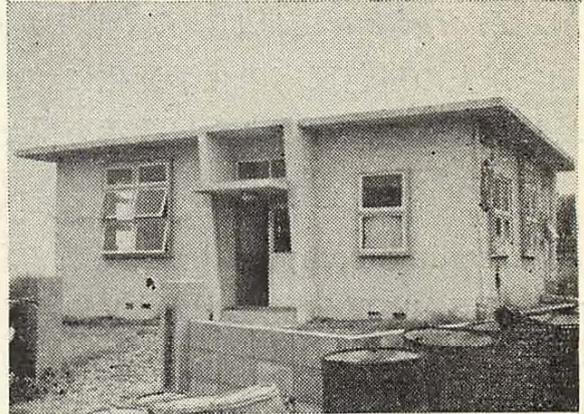


## 千葉大学文理学部銚子臨海研究分室

銚子犬吠岬燈台の西南，大漁節で名高い外川港に程近い犬若海岸に銚子市で海洋研究所を建て，第一期工事として21坪の研究室が昭和31年3月に竣工した。近い将来に第二期工事が着手され，39坪の研究室と宿舎ができ，計60坪の研究所になる筈である。将来は千葉大学に寄贈されることが確約されているが，一応，現在は千葉大学文理学部で銚子臨海研究分室として借用，雇員1名をおいて使用している。



建坪21坪のブロック平屋建，中には10坪の実験室2.5坪の小研究室，2.5坪の宿直室がある。他に海水ポンプ小屋(0.5坪)が附属している。学生10名位の実習には好適である。目下宿舎がないので学生実習には徒歩で25分かかる犬吠のユースホテルを利用しているが，2・3名で長期の研究をしたい人は宿直室に泊つて自炊すればよい。銚子は波が荒いのが難点であるが，岩礁が多く，海藻は可成り豊富で，千葉大学では下田の千原光雄氏の指導ですでに2回の海藻実習を行なったが，130余種の海藻を採集している。犬吠岬はマツモの分布の南限であり，またウルシグサ，ヒバマタ，エゾイシゲ等の寒海性のものが打ち上げられた記録があり，algal floraとしてはおもしろい所であると思う。使用申し込みは，千葉市小仲台町，千葉大文理学部事務長宛，銚子附近の材料・状況の問い合わせは，銚子市犬若町，千葉大臨海研究分室，高木仁平宛。尙案内のパンフレットがあります。

(西田 誠)

## 新 著 紹 介

Bruno SCHUSSNIG: Handbuch der Protophytenkunde Band II. Eine vergleichend-morphologische und biologische Darstellung der niederen Pflanzen für Biologen, Mediziner und Landwirte: Mit 880 Abbildungen in Text. X 1144 Seiten Großoktav. 1960. Ganzleinen. 137.50 DM. Verlag Gustav Fischer Jena.

ブルノー・シュスニヒ著: 原生植物のハンド・ブック 第2巻，生物学，医学および農学の人々のための，下等植物の比較形態学および生物学的記述，挿図880，1144頁，8ツ切判，クロス装幀，1960年発行，発行所グスターフ・フィシャー，価格137.5ドイツマルク。

この著書は，スタッフ(STAPP)博士が機能的，動的形態学の観点から記述した原生植物学の大著であると紹介しているように，有名なフリッチェの“藻類の構造と生殖”をしのご，独乙語の大冊で，菌類と藻類の比較発生形態学および器官学の総合記述書である。

第一章はキネトーム (Kinetom) で、特に中心体の構造や運動性各種胞子の繊毛および鞭毛の構造やでき方を比較記載し、最近の電子顕微鏡的研究を多く紹介し、中には我国の佐藤正一の車軸藻の精虫の写真も載っている。

第二章はコンドリオーーム (Chondriom) の形態と構造で、我国の篠原の *Mycobacterium* のミトコンドリアの写真も引用されている。

第三章は色素体 (Plastidom) の記述で、タオヤギソウやアサクサノリの色素体の写真も見られ、フンク (FUNK) や自身の研究が多く盛られ、更にウオルケン (WOLKEN) の電子顕微鏡的多くの仕事が紹介されている。更にピレノイド (Pyrenoid) については、古典的な研究の他に、自身の研究を多く加えて解明しており、眼点の構造にも論及している。

第四章は空胞 (Vacuom) で、第五章はアロプラズマ、第六章は原生植物の外膜構造の紹介で、特にハルダール (HALDAL) の *Syracosphaera* の電子顕微鏡写真は見事なものである。細胞膜の構造では奥野春雄の研究も引用されている。

第七章は細胞の形態発生で、先ず生長の数値的解明から高分子化学的説明も行ない、更に細胞の増加、分裂、接合と論及している。

第八章は無性生殖で、先ず藻類および菌類のゴニディア (Gonidia) について詳述し、更に菌類の子嚢および担子の各種胞子について各論的に述べ、藻類の胞子ではドリュー (DREW) の細胞学的研究も引用している。最後にバクテリアのものについて述べている。特にシオグサの X-Y 性染色体のオリジナルの研究も発表している。また山田と神田のアオノリの研究も紹介されており、故阿部広五郎、江本義数、広瀬弘幸、猪野俊平、草野、西林長朗等の研究が引用されている。

第九章は栄養生殖および繁殖で、先ず菌類から述べ、藻類に及んでいる。

第十章は有性生殖で、先ず藻類、あとで菌類の説明をしている。山田と斎藤のヒトエグサの図も出ている。カサノリ属、イワズタ属、ミル属などの自身の細胞学的研究も発表している。また阿部のウルシグサ属、神田のコンブ属、山内繁雄のフークス属、国枝溥のアカモク、千原光雄の緑藻、広江と猪野のホンダワラ属、猪野と広江のヒジキ属、猪野と西林のワカメ属、松浦一と権藤の *Peziza*、三宅と国枝のアオサ属、西林のコンブ属、岡部作一のアカモク、田原正人のスギモク属についての研究など、日本藻類学会々員の多くの仕事が、細大もらさず紹介されており、著者の文献に対する正確さと熱意に最大の敬意が表される。

(猪野俊平と西林長朗 岡山大学理学部生物学教室)